

三司さんのお兄さん

ハルデリム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

三司さんには実はお兄さんがいた!?!?

彼は天才である。

そんな彼の日常を見て

「へーい、その綺麗なおねーさん一緒にお茶しない? え? お茶やだ? じゃ僕といことし? つ何?!? 体が動かないだと?!? これは、茉優! 解け! これ解け! ここ路上だからとかないと死んじゃうから! お願いします。解いて下さいなんでもしますから!」

「ヤーだ。」(3)

「ノオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
見る前に死んでしまうかもしれません。」

目次

プログラグ

1

プロローグ

任務が始まってから数週間が過ぎて三司あやせの『パッド大事件』が起きて数日後までこの世とは思えないほど絶望した顔で教室に入ってきた。

いや、あの顔はヤベーだろ。女の子がしちゃいけない顔してるぜあれ。

同じように気になったのか隣に居た立派な男の子の周防恭平がこちらを見つめてい

る。

「あれ、暁なんかやった？」

「いや何も、ていうかなんで最初に俺を疑う？」

「いや最近一緒にいる事が多かったからさ、それで何かと思つて。」

「特に何もやってないけどな、てういか昨日まで全然元気だったろう。一緒に水着を買いに行つたし。」

「だよねー。あ、またため息してる。」

「放課後あたりに聞いてみるか？」

「そうだねそうしよう。」

そう言つて昼休みになった。もう我慢できない。

三司あやせはこの学校の生徒会長であるため、いやでも注目を浴びる。そんな彼女がこの世の終わりみたいな顔をしていたら、こっちまでテンションが下がる。そしてそれは時間が過ぎるにつれどんどんひどくなっていき、ため息の数も増えていく。

結論空気が重い。非常に重い。

そして三司さんにどうしたのかを聞こうと席を立つた瞬間に二条院さんが先に声をかける。

「三司さん、どうしたんだが朝からこの世の終わりみたいな顔をしていて。何か手伝えることはないか？その、何とか見ているこっちの方が辛いので困っていたら是非手伝いたいんだが。」

「俺たちも困っていたら手伝わせてくれないか？」

彼女に続いて俺たちもなんか手伝えることはないかと近づく。

「…さん… てくるんです。」

「なんて？」

「に…んが…かえ…です。」

「すまないよく聞こえないのだ「兄さんが！帰ってくるんです！」…え」

「よ、よく聞き取れなかったんだけど、ももう一度お願いできる。」

「兄さんが…帰ってくるんです。」

「残念ながら、それができないんですよ。彼：。あんのバカ兄はアストラル能力に関しては天才的なセンスの上に、頭も良すぎるあまり切り捨てられないんですよ。多分あの人は本当に核ですら死なないと思いますよ。」

三司さんがのため息と同時に周りの人たちもため息をする。

「でも、問題つて三司さんの兄は何をしでかしたんだ？」

「多分この学園全員が知っていることなら間違いないく、『ニコラ・テスラ事件』だろうな。」

『『ニコラ・テスラ事件』？二条院さん、一体どういう事件なんだそれ？』

「とある夜、その夜は本当は何もない夜だった。皆布団を被り眠りに入ろうとしていく頃。バーンと明かに何かが発射した音がした。その音に皆はつられて目を覚ました。外を見るとでっかい謎に装置が電気を帯びてぐるぐる回り続けているではないか。その装置の前に座りさも当然かのように電気触れながら漫画を読んでいる人物がいた、かのニコラ・テスラのように。そして彼はアストラル能力はエネルギーの変換が出来ることを証明した。もちろんこの後彼は生徒指導処置を受けた。」

「おいおいまじかよ。」

ただのヤベーやつじゃねーか。

「彼は生徒指導処置を受ける前にこう言ってた。」

「『ヤバイとは思ったが。欲望を抑えきれなかった』だろ」っ!？」

「どうもはじめまして在原 暁くん。Mrs. タイラーがお世話になったみたいだね。僕の名前は三司みこと。以後おみしりおkぶへらら!!?」

「お前を… 殺す… 今… ここで…」

「ちよ、ちよつと待とうかラブリーマイエンジェルあやせたん。ちよつとそれおいてブラックホール作ろうとしないでね!ね!」

「いつペン殴らせろおおおおお!」